

無私で素朴な、小さなハンスの生き方は、まさに個性主義である。その美しさは、ワイルドの魂に起因している。芸術家ワイルドの友情は、プラトンの頭脳とキリストの心を合わせ持った個性主義といえる。それは、けっして燃え尽きることのなかった幸福な王子の鉛の心臓のように、外見からは見極めることはできない。それゆえに、人々はそれを投げ捨てるかもしれない。だが、心の豊かな人々には、それは理解されるだろう。

ワイルドとペーターの『ルネサンス』

—「芸術」と「自然」、批評論について

木村克彦

(作新学院大学助教授)

模倣は芸術か。ワイルドをペーターのエピゴーネンとする向きは多々あった——ワイルドはペーターを誤読し云々——否、誤読したのではなく、おそらくは模倣から、ワイルドは出発したのだ。それが模倣に終わらなかったことが、ワイルドをワイルドたらしめている。彼自身言う。「模倣の終わるところにのみ芸術は始まる」(『獄中記』)。問題は多岐にわたるので、今回は二点に絞りたい。

(i) 「芸術」と「自然」

ワイルドは「嘘の衰退」において、自然を芸術よりも低位に置いた言わば「自然蔑視」の態度をとり「自然などどうでも良い」とか「自然が芸術を模倣する」とまで言い切ってしまう。『ルネサンス』にも「自然軽視」とも思える言が何箇所かあるが、私たちはそれらがペーターその人の自然観ではなく、ヴィンケルマンやグリムからの引用であること、また、ペーターが他者を評しての言であることに傾注すべきである。実際ペーターは「序論」や「ダ・ヴィンチ論」で自然の美の重要性を説いている。また「ジョルジョーネ派」を良く読んでみると、ペーターの真意は、こと芸術家が自然を創作の対象としたときには、その主体を芸術家の方に置き、自然はあくまで素材となる——但しそれは美や力を有した素材であり、芸術家はそれらを表現し得る精神を持たねばならぬ、ということらしい。ところがワイルドとて真意は同様かもしれない。ワイルドの自然蔑視の発言は全て「嘘の衰退」中の言であり、それらは文字通りワイルドの嘘・ポーズなのである。「ラヴェンナ」においては自然の美を大いに称讃し、『獄中記』では「自然とともに生きるべき」とまで言っているからだ。ワイルドは『ルネサンス』を自己のものとして消化し、「自然蔑視」という仮面を被ったのである。

(ii) 批評論

ペーターは、その繊細な感性でもって、ごく微細な印象をも自らの批評に織り込んだ。故にペーターの批評論は、印象・主観・個人主義的なものとなった。しかしペーターは、そうした批評は個人の狭い枠内にとじこもり独断に墮する危険性もあることを認識していたようで、「ルカ・デルラ・ロbbieア」や「ヴィンケルマン」においては、ギリシャ的な古典性をも踏み外すまいとする姿勢がみられる。ペーターは自己を表出する一方で、「広さ、一般性、普遍性」(「ルカ・デルラ・ロbbieア」)をも同時に実現しようとした。

ワイルドも「芸術家としての批評家」等において、個人的・印象主義的批評論には、とりあえず讃同を示している。しかしペーターが『ルネサンス』の中で、ある芸術家を論ずる場合、必ずその伝記に言及し、伝記に即しながら論を進めるのに対し、ワイルドは批評の対象を「新しい創造への出発点」であるとしてしまう。何よりも自己の才能に惚れ、御し難い自己と対峙し、何よりも自己を知らんとしたワイルドならではの批評論であると言えよう。おそらくワイルドが『ルネサンス』の中で最も魅せられた部分は、彼自身、長々と引用している「ラ・ジョコンダ」の創造的・詩的描写の部分であったろう。ワイルドには「広さ、一般性」よりも、まず「個」の表出が肝要であった。

またペーターは「ヴィンケルマン」や「ピコ・デルラ・ミランドラ」において、芸術家と時代背景に言及し、歴史的批評論を展開している。しかしペーターの繊細な印象主義はその枠を突き破り、「ジョアシャン・デュ・ベレ」等においては、そこに個性を付け加えるべきだと主張する。ワイルドの場合は「芸術はどんな時代の象徴でもない」として芸術と時代を切り離してしまう。しかしこれも「嘘の衰退」の言葉であり、時代がなければ時代の子も存在しない。ペーターは「序論」の中で、「天才は常に時代を超越する」というブレイクの言葉を引用しているが、ペーターにとって「時代を超える」とは、時代精神を背景に、ギリシャ的古典性を一方に置き、平静な研究態度と繊細な感性——想像的理性(「ジョルジョーネ派」)——でもって時代を超越することを意味した。ワイルドの場合、芸術と時代を切り離したのは、やはりポーズに過ぎず、『獄中記』においては自ら、自分は時代の象徴であったと述べている。ペーター同様、ワイルドとて時代の精神を背負っていたのだ。ではワイルドをして時代を超越せしめたものは何だったのか——ペーターと同様にワイルドにも、どこまで自己を表出するのかという問題があったと思われる。自己認識という魔物にとりつかれていた一方で、ワイルドにも「広さ、一般性、普遍性」への希求もあったであろう。それらを同時に実現せしめたもの——それはもはやペーターの影響などというのではなく、文字通りワイルドのオリジナリティ——ウィットウィットの才に他なるまい。